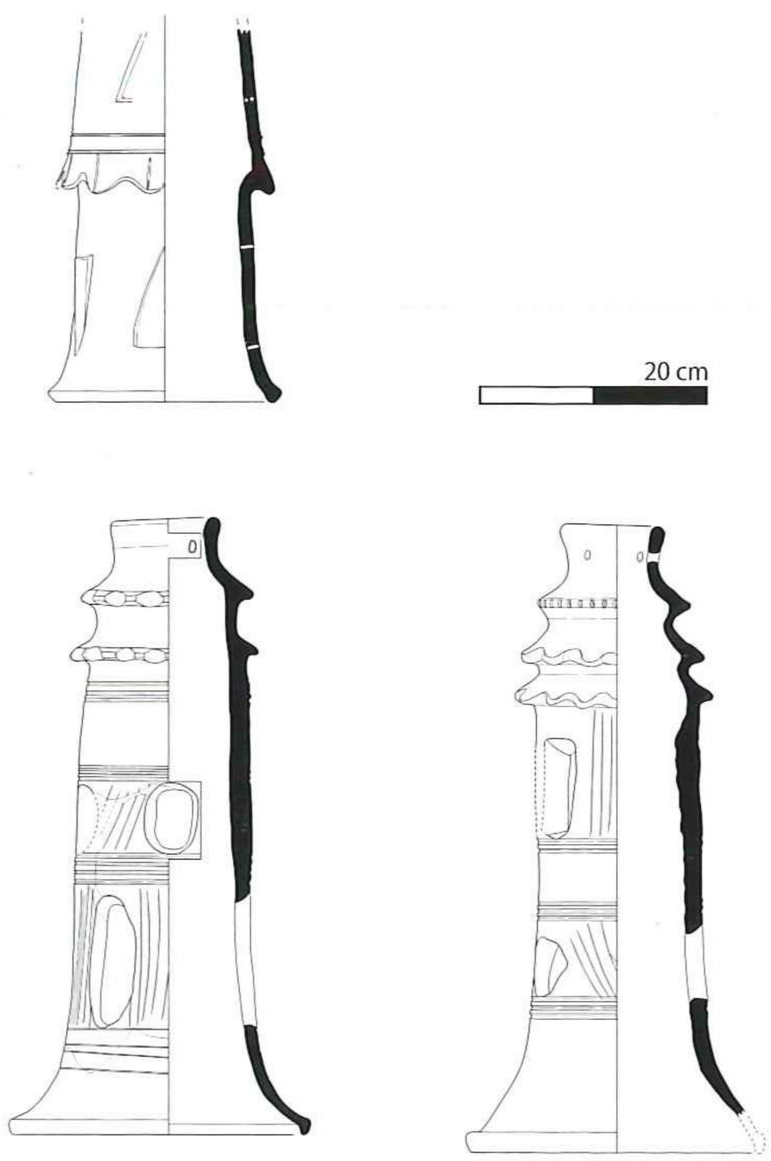
カナン文化の継続と変容

後期青銅器時代と鉄器時代Ⅰ期の移行は前1200年前後と考えられ、かつては前者の破壊層をヨシュア記に描かれるイスラエルの民によるカナン都市の征服と結び付けて解釈されていた。ところが、最近、少なくともガリラヤ地域においては、後期青銅器時代末から鉄器時代最初期にかけて、文化が断絶するというよりも連続していることが指摘されてきた。テル・レヘシュにおける後期青銅器時代から鉄器時代への移行期を厳密に調査することは、C地の地域のイスラエル時代を理解するためにも重要な課題となるはずである。まず、テル下段のテラス北側に位置するC地区では、複数の部屋を有する鉄器時代Ⅰ期の建造物が出土した。さらに、その北側の下層からは後期青銅器時代の遺構が検出された。他方、鉄器時代Ⅰ期とみられる建造物の一部には、複数の石柱が並ぶ部屋が発見されている。また、同一建造物の別の部屋からはCult Standと呼ぶ祭祀遺物が3点ほど出土し、生命の木（ナツメヤシ）をあしらった2点の土器片、焼成粘土の仮面の一部なども出土した。それはこの複合建造物が鉄器時代Ⅰ期の宗教施設であった可能性を示唆する。しかし、そこに後期青銅器時代から連続性が観察されうるのかどうか、という点に最終的な結論を下すには、さらに厳密な比較調査が必要である（月本）。



カルトスタンド実測図

鉄器時代Ⅰ期のカルトスタンド（C地区）

テル・レヘシュ採集のミニチュア神殿（鉄器時代Ⅱ期か、模造、原資料はエルサレム博物館）
左：側面　右：正面

これまでの発掘成果によって、テル・レヘシュの遺跡丘に残された居住史の様々な局面が明らかになりつつある。その中で注目すべき点のひとつは、後期青銅器時代末から鉄器時代Ⅰ期にかけての明確な物質文化の継続性であろう。この時期のパレスチナは、同地域を支配していたエジプトの撤退、「海の民」の入植、初期イスラエルの出現などによる混沌の時代として特徴づけられる。後期青銅器時代に勢力を誇っていたハツォールやラキシュといったカナン人都市が崩壊した一方で、現在のイスラエル北部の低地では、カナン系の物質文化を持つ都市が復興（または存続）し、繁栄していたことが注目を浴びてきた。テル・レヘシュ遺跡では、建造物、土器、オリーブ油生産など、複数の要素が後期青銅器時代から鉄器時代Ⅰ期への継続性を示しており、このような発掘成果は、後期青銅器時代のカナン人都市が、鉄器時代初頭の混乱期を迎え、どのように繁栄を取り戻し、どのように終焉を迎えたのか、というテーマを考察するための重要な資料を提供するはずである。テル・レヘシュは鉄器時代Ⅰ期に最盛期を迎えるが、その基礎は後期青銅器時代にあったといえようか（月本）。

生命の木の線刻文

タンバリンを抱えた女神像（鉄器時代Ⅱ期、A地区）